

中学2年生の教科横断型「JSLカリキュラム」の実践 —漢字圏と非漢字圏、課題の異なる3人のグループ学習の試み—

東京都北区立赤羽岩淵中学校 田中阿貴

1. はじめに

日本語指導の早い(連体修飾語や複文に入る)段階で文部科学省の「JSLカリキュラム」(以降JSL)を導入した方が学習言語の確立や抽象的思考力の育成につながると学び、早期からJSLを取り入れ始めた。筆者は英語科の教員であり、日本語指導も2年目で他教科の専門性もないが、主要5教科の教科書を熟読し、教科内容と教科理解に必要な日本語を考え、どう教えれば教科と日本語の両方の力をつけられるのか試行錯誤しながらJSLを行う中で手応えを感じつつある。

2. 実践の場の特徴と対象生徒

2.1 実践の場の特徴

以前は漢字圏と非漢字圏の生徒を分けていたが、以下3人の課題の異なる自校生徒を筆者が週3時間(9月~2月)取り出しで理科、国語、地理のJSLをグループ学習で行った。この試みが成功すると、課題の異なる生徒たちでも学年別でグループ学習ができると考え実践した。

2.2 対象生徒の状況(9月時点)

A: 非漢字圏・来日1年・日本語初級後半学習中(定着)・漢字300程度(定着)・英語が流暢
日本語初級前半終了後の9ヶ月目からJSL導入(週4時間)+日本語2時間

課題: 日本語の発話に流暢さがあり、母国では学力も高かったが、漢字・語彙・学習言語に課題があり、数学(計算)と英語以外は授業が理解できず、テストでも得点できない。

→JSL3時間、個別1時間(漢字・数学等の補充)、日本語2時間の週6時間指導

B: 漢字圏・来日1年半・日本語初級終了(定着)・漢字1000終了(定着)

日本語初級前半終了後の4ヶ月目からJSL導入、日本語と並行学習(週6時間→週4時間)

課題: 学力も日本語力も高く、テストでもある程度得点できるようになったが、漢字に頼るところが多く、暗記はできても記述や説明ができない。日本語の発話に流暢さがない。

→JSL3時間の他、放課後個別1時間(地理・歴史等の教科補充)の週4時間指導

C: 漢字圏・来日3年(小5来日)・日本語初級終了(定着せず)・漢字1000学習中(定着せず)

入学当初は教科補充をしていたが、途中からBと日本語文型の学び直しとJSLの並行学習

課題: 知っている語彙・表現は多く発話量も多いが正しく話せず、書字には大きな課題があり正しく表記できず、文も作れない。授業が理解できず、テストでも得点できない。ただ、学習内容を理解し興味を持つと、深く思考し教科の本質に迫る意見が言える。

→JSL3時間の他、個別補充1時間(特殊音・書字・英数等の教科補充)の週4時間指導

3. 実践の目標

課題がそれぞれ異なる3人がともに学ぶことにより、理解したことを仲間に説明したり、考えを述べたりする活動を通して、日本語で表現する力をつける。また、教科の内容に興味を持ち、抽象的思考力を伸ばして教科内容を理解する。日本語と教科、各教科間につながりをもたせることにより、異なる文脈で繰り返し同じ語彙や表現に触れ、学習言語を習得する。

4. 具体的な実践の内容とその過程

在籍学級の進度に合わせて、週ごとに教科を変えて指導。視覚的補助（写真やイラスト、地図、動画）やリライト教材を用いて指導した。また、個々の課題には個別指導時間で対応した。

4.1 国語×社会（地理・歴史）・理科（科学・地学）

自作リライト文で指導。熟語はリライトせず非漢字圏生徒のために英単語、外来語には漢字圏生徒のために漢字を入れて、語彙力強化を図った。リライト文の難易度を徐々に上げ（既習漢字のルビをなくし表現も原文に近づける）、最終的には論説文は教科書の原文へとつなげた。

生徒が音読した後、意味の区切りで文意を生徒が説明し、筆者が視覚的補助を用いて内容理解し、心情や根拠などたくさん生徒に問いかけをしながら進めた。また、地名が出てきた際には地図帳で確認（地理）し、平家物語では源平の争乱を教科書で確認（歴史・地理）し、論説文等で理科の既習事項が出てきた際には教科書で確認（理科）し、各教科との統合学習を行った。

4.2 理科（天気分野）×社会（地理）

生物分野は漢字圏生徒が漢字情報で理解できるため非漢字圏生徒のみ個別指導を行い、天気分野を3人で学習。湿度や前線など母国でも学習したことがない抽象的な概念を日本語で理解できるよう、写真やイラスト、実物、実験動画、自作教材を用いて説明し、たくさん問いかけながら学習した。非漢字圏生徒には、上に昇る空気の流れ→上昇気流等、音読みの熟語を定着させるよう指導した。また、寒冷前線のでき方や通過後の天気など、日本語で説明させる活動を行った。日本の気候では地図を用いて地方名や山脈を確認し、地理との統合学習を行った。

4.3 社会（地理）×理科（天気・地学）

地方ごとの日本地理（九州・中国四国・中部地方）を学習。興味を持てるよう美しい写真とワークシートで地形、農業、産業等を学んだ。用語を学習するだけではなく、なぜその場所でその産業が盛んなのか地形や気候を踏まえて説明させる活動を多く取り入れた。また、理科の季節風と山脈による気候の特徴（2年）や地学分野の扇状地（1年）などと統合させて学習した。

5. 結果と考察

5.1 生徒の変容

在籍校の授業は理解できない生徒たちが取り出しのJSLではよく考え、発言し、教え合い、主体的に楽しく学ぶことができた。用語や日本語を間違えても教科の本質をついた発言が多く、教科内容を日本語で学び取ることができた。また、日本語が共通言語となり、学んだことを日本語で説明しようと、擬音語、指示語、ジェスチャーなども交えて懸命に表現する中で表現力が向上した。生徒Aは熟語を習得し、分からない漢字や表現も推測して学校のワークもある程度自分で解けるようになった。生徒Bは発話量が増え、日本語で説明でき、記述問題もできるようになった。生徒Cは新しい知識や表現を増やし、書く際も間違いを意識して取り組めるようになった。

5.2 考察

母語や課題が多様な生徒でも視覚的補助やリライト教材、問いかけ等の工夫などで、グループ学習形式でJSLができ、教科理解と日本語力向上の両方に有効であると分かった。但し、個別指導時間も確保し、個々の課題に寄り添う支援と併用すると効果的であると分かった。

課題は、JSLと在籍校の授業やテストとの差が大きすぎてJSLが在籍校での学びにつながりにくいことである。JSLでも抽象度や日本語難易度を上げていき在籍校の学びにつながる工夫も大切だが、在籍校でも多様な生徒が学べるようJSLの要素を取り入れるなど、連携が必要である。